

童貞で元ヤンの整  
備士に助けてもらい  
懷かれてお付き合い  
したら絶倫猛獣に豹  
変されてお嫁さん  
にされちゃうお話

体験版

なぎさ

なぎさの妄想部屋

## 第一章 困り眉の男

金曜日の夜、近道に選んだ裏路地は、湿ったアスファルトと腐ったごみの臭いがした。

「ねえちゃん、無視すんなよお。いいじゃん、一杯だけ」

「……急いでますので」

「つめたいなあ！」

赤ら顔の男が吐き出す酒臭い息が、私の頬にかかる。逃げよう

とする腕を、強い力で掴まれた。

痛い。怖い。声が出ない。

繁華街のネオンは遠く、誰もこの暗がりには気づかない。

（このままじゃ、まずいかも——）

男が強引に私を引き寄せようとした、その時だった。

ドカツツ!!

重い肉がぶつかるとような鈍い音が響き、視界を塞いでいた男の体が宙を舞った。

まるで紙屑のように吹き飛ばされ、ゴミ袋の山に突っ込んで沈

黙する。

「……いやがってんだろ、くそ野郎」

現れたのは、夜闇の中でも鮮烈に輝く金髪の男だった。

長身で、服の上からでもわかる分厚い胸板。袖から伸びる腕には浮き出た血管が走り、その拳は凶器のように固く握られている。

「あ？なにしやがんだ、テメエ……！」

「寝てろって言ってるだよ」

よろりと起き上がりかけた男の鳩尾に、鋭い蹴りが深々と突き刺さる。

男はうめき声すら上げられず、その場に崩れ落ちて動かなくなつた。

圧倒的な暴力。

二十代前半くらいだろうか。その瞳に宿る光は、獲物を狩る獣のように獰猛だった。

彼がゆつくりと、私の方へ手を伸ばしてくる。

「っ……！」

「——だいじょうぶですか？」

身構えた私の耳に届いたのは、拍子抜けするほど間抜けで、優

しい声だった。

恐る恐る目を開けると、そこにはさっきの殺気だった表情とは別人のような、困り眉の青年がいた。

「ちよ……血が……」

「ん？ああ、これっすか？」

彼の手の甲には、血が赤く滲んでいる。

「これはこいつの鼻血っすから！あ、やべ、汚ねえか……すんません、せっかく綺麗な服着てるのに……！」

彼は慌てて手を引っ込め、倒れている男の服でゴシゴシと血を

拭い始めた。

「あ、そう、じゃなくて……！た、助けてくれて……ありがとう  
ございます……」

「え？……いや、怪我無いっすか？あつたらあいつ、もう一発ぶん殴ってきますけど」

「な、ないです！大丈夫です」

「ならよかった。……立てます？」

腰が抜けてへたり込んでいた私に、彼は躊躇いながら手を差し出した。

「あ……ごめんなさい。こ、怖かったから……腰、抜けちゃつて……」

「あー……」

彼は少し考え込み、私の隣に屈みこんだ。

「肩、貸しましょうか。俺でよければ」

「あ、ありがとうございます……お願いします……」

わざわざ地面にしゃがみ込んで私と目線を合わせてくれた、その当たり前のような仕草が、妙に落ち着かせてくれた。悪い人じゃ、なさそう。



「……。じゃあ、家まで……。送っちゃっていいですか？」

「ええ……。お願い、してもいいですか？すみません」

「いや、ちよっ……。警戒心ゼロっすね！おねーさん、大丈夫っすか？俺みたいな男に送られちゃって……。危ないっすよ」

「そんなこと言ってくれる時点で、危なくなさそうだけど……」

「わかんないっしょ！男はオオカミっすから……」

「ふふ、本当に危なそうに見えない」

私の言葉に、驚いたような顔をした彼。それから深くため息をついた。

「はあ……どうせ童貞ですよ」

「えっ！嘘?!全然みえない……」

思わずまじまじと彼の顔を見てしまう。整った顔立ちに、この体格。たくさん開いたピアス。そして少しワルそうな雰囲気。とても経験がないようには見えない。

「よく言われます……こんなに純情なのになあ。なーんか女とはどうもうまくいかねんすよ……。ねえ、おねーさん俺の童貞もらってくださいます？」

「ちょ……いきなりは……」

「いきなりは？いきなりじゃなかったら脈ありっすか!？」

食い気味に顔を近づけてくる彼に、私はたじろいだ。

「ちよっ、こわいこわいその勢い……！そうじゃなくて、とにかく何も知らないのにそんなこと判断できないでしょ」

「……彼氏、いるんっすか？」

不意に投げかけられたその声は、先ほどまでの明るい調子から一転して、ひどく真剣な響きを帯びていた。見上げると、街灯の逆光のせいで彼の表情はよく見えない。けれど、その体軀から発せられる熱のようなものが、じっと私に向けられているのを感じ

た。息を詰めて、私の言葉を待っているのがわかる。

「いないけど……」

戸惑いながらもそう答えた瞬間だった。

彼の周りの空気が、パァッと華やいだ錯覚に陥った。隠しきれない安堵と喜びが、大きな身体全体から溢れ出している。

「じゃ、今度メシ行きましょうよ！もつと俺を知ってもらわないと！……それくらいはいいっしょ？」

グッと身を乗り出してくる勢いに、思わずたじろぐ。怖いというよりは、そのあまりにも真っ直ぐで嘘のない熱量に、目が眩ん

だのだ。

「うん……というか、むしろ私にご馳走させて。今日は助けてもらったし、お世話になったから」

私がそう微笑むと、彼は目を丸くしたあと、夜の街角に響くほどの大きな声を上げた。

「わーまじか！嬉しっす！めっちゃ嬉しい！」

大きな両手を握りこみ、本気で喜んでいる。こんなに全身で感情を表現する大人の男性を、私は他に知らない。

「あ、あのさ……名前、聞いていいっすか？」

照れ臭そうに、彼が首の後ろを掻きながら尋ねてくる。

「澄香、です」

「澄香さん……めっちゃいい名前っすね！」

彼は私の名前を、まるで何か大切な宝物を扱うかのように、舌の上で転がすように呟いた。

「ふふ、ありがとう。……あなたは？」

「俺は鉄平っていいます」

「名は体を表すって感じね……とても似合ってる。えっと、鉄平くん、でいい？」

「なんとでも！澄香さんが呼びやすいように呼んでください！」

満面の笑みで即答する彼に、私の頬も自然と緩んでしまう。

結局、彼は「夜道は危ないんで」と、律儀に私のマンションの玄関先まで送り届けてくれた。あんなに喧嘩が強くていかつい見た目なのに、私との間には距離を保って指一本触れようとはしなかった。

「戸締りしつかりね、おねーさん……じゃなくて、澄香さん！じゃあ、また連絡します！」

風紀委員のような警告を残し、彼は足取り軽く夜の闇へと帰っ

ていった。その後ろ姿が見えなくなるまで、私はエントランスに立ち尽くしていた。

オートロックを抜け、自分の部屋に戻る。静まり返った室内で、そっと息を吐き出した。手元のスマホの画面には、先ほど交換したばかりのメッセージアプリのアイコンが光っている。ああいうタイプの男性と知り合いになるのは初めてだ。私の日常には決して交わることのなかった、違う世界で生きている人。

『家に着きました！今日はほんとに、澄香さんに会えてよかったっす！』



さっそく届いた彼からのメッセージには、可愛らしい犬のスタンプが添えられていた。

それを見つめていると、胸の奥で、小さくトクンと何かが跳ねるのを感じた。

前の恋愛が、酷い終わり方だったから——恋からはすっかり遠のいていた。

優也と出会ったのは、学生時代に働いていたカフェのバイト先でだった。

常連客として通ってきていた彼は、爽やかで人当たりがよく、店のスタッフからの評判も悪くなかった。ある日、シフト終わりに「よかったら今度ご飯でも」と誘われて、舞い上がってしまった。それまで恋愛経験らしい経験もなく、こんな風に誰かに「気に入られた」のが初めてだったから。

付き合うことになって、最初の数週間は夢みたいだった。

ただ、態度が変わるのは早かった。

気がつくと、デートの場所も時間も全部彼の都合で決まり、私の予定は二の次になっていた。連絡はいつも一方通行で、彼が忙

しい時は何日も既読がつかないのに、私が同じことをすれば不機嫌になった。「今日忙しい」と言っただけの夜、共通の知人から、別の女の子と歩いていたという話を聞いた。問い詰めれば「お前の被害妄想だろ」と一蹴され、何度繰り返されても抗議すること自体が許されなかった。

『重いんだよ、お前は』

『そんなんだから他に行きたくなんの』

少しずつ、心が削られていった。

私が悪いんだ。私をもっと聞き分けがよければ。私が我慢すれ

ば。そう思い込もうとして、思い込めなくなつて、それでも別れることはできなかつた。「別れたい」と口にする勇氣すらなくなつていた。彼に否定されることが怖くて、彼から否定されない自分でいることだけに、毎日を費やしていた。

限界が近かつたのを、見かねたのはバイト先の店長だつた。

四十代の女性で、私の異変にずっと気づいていたらしい。ある日「澄香ちゃん、ちよつと話そうか」と裏に呼ばれて、気がついたら全部を話していた。店長は黙って聞いて、それから「私が間に入るから、別れなさい」と言ってくれた。

優也との別れ話は、店長の立ち会いのもとで行われた。私は最後までほとんど何も言えなかった。ただ俯いて、店長が代わりに話してくれるのを聞いていた。優也は最後に「飽きてたところだつたし、ちようどよかったわ」と吐き捨てて去っていった。

別れられたのに、ちつとも晴れやかじゃなかった。

別れることすら、自分の力でできなかった。あの一年間、私は最初から最後まで、自分の意思を一度も貫けなかったのだ。その事実が、別れた後もずっと胸の奥でじくじくと痛んだ。

それ以来、誰かと心を深く通わせることに、ずっと臆病になっ

ていたのだ。

けれど――。

私の言葉一つに一喜一憂し、全身で喜びを表現していた鉄平くんのあの顔を思い浮かべると、塞ぎ込んでいたはずの心がふわりと浮き立つ。

嘘のない、真っ直ぐな瞳。私を庇ってくれた、広くて温かい背中。

「……そっか。私、笑えてたんだ」

スマホを胸に当て、目を閉じる。恐怖の記憶はすでに薄れ、代わりに彼の不器用な優しさが、冷え切っていた私の心を少しずつ溶かし始めている。

彼と食べるご飯は、きっと美味しいだろうな。そんな他愛のない想像が、今はひどく心地よかった。次に会う約束が、こんなにも待ち遠しいなんて、いつぶりだろう。私は弾む指先で、彼への返信を打ち込み始めた。

初めての食事は、彼が指定した駅前の賑やかな居酒屋になった。

「ここでよかったの？」

「あー、俺あんま高級なとこだと味わかんないから、これぐらいが丁度いいんすよ。澄香さんはもっとお洒落なところがよかった？」

「ううん、私もこういうところ好き」

「……そっか。じゃあ仲間っすね」

彼はジョッキを片手に、屈託のない笑顔を見せる。金髪のいかつい見た目なのに、笑うと目尻が下がって幼く見える。そのギャップが、妙に居心地がよかった。



「澄香さん、何の仕事してるの？」

「普通の会社員、事務とか経理とか。……あなたは？」

「親父の会社で整備士やってます。車の」

「へえ、すごいよね」

「すごくないっすよ……弱小も弱小っすから。親父と俺と、あと数人しかいないような町工場なんで」

彼は照れ臭そうに焼き鳥を頬張る。けれど、その指先には落ちない油の跡があり、爪は短く切りそろえられていた。誠実に仕事をしている人の手だ。

「そんな卑下しなくても。手に職があるって素敵じゃない」

「……まー、そんなこたーいーんですよ」

ぶっきらぼうに逸らした耳が、少し赤くなっていた。

二度目に会ったのは、翌週の土曜日だった。駅前で待ち合わせた鉄平くんは、デニムにラフなパーカーという出で立ちで、けれどあの金髪はどこにいても目立つ。すれ違う人たちがちらちらと振り返っていく。そんな彼と並んで歩いていると、不思議なことが起こった。

「よお鉄平！久しぶりじゃねえかよ！」

大通りに出て数分もしないうちに、ヤンキー風の青年が向こうから手を振ってきたのだ。派手な柄シャツに太いチェーンのネックレス。どう見ても穏やかな人種ではないのに、鉄平くんを見た途端、人懐っこい犬のように駆け寄ってくる。

「おー！元気してた？車、調子どう？」

「おかげさまで絶好調よ。あん時はマジ助かった」

「だからたいしたこととしてねーって。エアフィルター換えたただけだし」

男は満面の笑みで鉄平くんの背中をバンバン叩き、去り際に私に向かって深々と頭を下げた。鉄平くんが苦笑しながら「昔の連れっす」と説明する間もなく、次の相手が現れた。

「おや、鉄平じゃないか」

交差点で信号待ちをしていると、今度は反対側から声がかかった。制服姿の警察官だった。四十代くらいの、柔和だが目の奥に鋭さのある男性。今はどこか気安い笑みを浮かべている。

「あ、小林さん。お疲れ様っす」

「最近どうだ？また面倒事起こしてねえだろうな」

「起こしてねーっすよ！俺もう真面目な社会人っすから。小林さんこそ、こないだ裏通りで猫に餌やってサボってたのチクりますよ？」

「バカ、あれは地域交流だ！まあ、元氣そうで何よりだ。……そっちのお嬢さん、コイツは手のかかるバカですが、根はいい奴なんでよろしく頼みますよ」

「ちよ、小林さん！余計なこと言わなくていいっすから！」

警察官が笑ってパトロールに戻っていくと、私は思わず鉄平くんの顔をまじまじと見上げてしまった。

「……なんで警察官とあんなに仲良しなの？」

「え？あー……昔、俺ちよつとやんちやしてた時期があつて。その時めちやくちや世話になったんすよ。何度も補導されて話してるうちに、なんか歳の離れたダチみたいな感じになっちゃって」

「ダチって……」

ツツコミが追いつかないまま商店街に入ると、今度は和菓子屋の店先から身なりの良い老人が顔を出した。仕立てのいいジャケットに白い髪を整え、杖をついた小柄な紳士。品のある佇まいだが、その目には独特の凄みがある。

「おう、鉄平。元気にしてるか」

「あ、会長。どうも、ご無沙汰してます」

会長。何の会長だろう。聞いていいのか迷う響きだった。

「こないだはうちの若いもんが世話になったな。おかげで助かった」

「いや、俺は別に大したことしてないっすよ。たまたま通りかかっただけなんで」

老人が去った後、鉄平くんは頭の後ろを搔きながら、ばつが悪そうに笑った。

「あー……」

「……ねえ、今の人。お父さんの工場のお客さん？」

「いや、なんか俺、街歩いて『これほっとけねーな』って揉め事とか困り事に首突っ込む癖があつて……。そういうのやってたら、ああいう知り合いが増えてたんすよね。あの会長もその繋がりつつーか」

「……首突っ込むって、危ないことしてないよね？」

「してないっす！ただの近所付き合いの延長みたいなもんっすよ！」



ヤンキー、警察官、そして「会長」。歩くたびに多種多様な人間から声をかけられる光景に、私は軽い目眩を覚えていた。

ただ、本人には自覚がないようだが、私にはわかった。彼は誰に対しても分け隔てなく手を差し伸べるタイプなのだ。相手の肩書きが何であろうと、目の前の人が困っていたら助ける。それだけ。そして助けられた人たちが、自然と彼の周りに残る。結果として生まれた人脈が、堅気もそうでない人もごちゃまぜの、彼だけの不思議な交友関係を形作っているのだらう。

「さーて、腹減ったなあ。澄香さん、何食べたいっすか？」

聞かれた瞬間、反射的に身体が強張った。

『何が食べたい？』

この質問が、私はずっと苦手だった。

前の恋人——優也と付き合っていた頃、何かを答えれば「えー、今日そんな気分じゃないんだけど」と返され、「優也が決めているよ」と譲れば「そういうとこだよ。自分で決められないの？」と鼻で笑われた。どちらを選んでも正解がなくて、そのうち「何食べたい？」と聞かれるだけで、喉の奥がきゅつと締まるようになっていた。

——早く、何か答えなきや。

焦るほど、言葉が出てこない。俯いて、指先を握り込む。

「……ごめんなさい、えつと……」

「ん？」

鉄平くんがひよいとこちらを覗き込んできた。急かす気配はない。ただ、のんびりと私の言葉を待っている。

「……思い浮かばない、かも」

情けない声で、ようやくそれだけ絞り出した。

「お！じゃあ俺が決めちゃっていいですか？」

顔を上げると、彼はきらきらした目で空を見上げながら、あごに手を当てて真剣に考え込んでいる。

「そうだなあ、中華とかどっすか！この先に美味しい町中華があるんすよ。麻婆豆腐がマジでやべえの。あ、辛いの大丈夫っすか？」

拍子抜けした。否定もしない。呆れもしない。ただ嬉しそうに、自分が好きな店を提案してくるだけ。それだけのことが、こんなにも楽で、こんなにも救われるなんて。

「……うん。辛いのは、好きだよ」

「お！やっぱ俺ら相性バッチリっすね！じゃ決まり！」

鉄平くんは、そのままぐいっと私の手を引いた。引っ張られるままについていきながら、鼻の奥がつんとした。笑っているのに、泣きそうだった。

それから、私たちはちよくちよく食事をするようになった。生きる世界も、タイプも全然違うのに。不思議と会話が途切れず、自然体でいられる。彼からの真っ直ぐな好意に触れるうち、いつしか強張っていた心も解れていった。

彼と過ごす時間が心地よくて、離れがたく思い始めていた頃――

「澄香さん、そろそろ俺のこと……わかりました？」

帰り道、いつもの分かれ道で彼が足を止めた。街灯の逆光で、彼の表情がよく見えない。

「えっ？」

「初めて会った時、『何も知らないから判断できない』って言ったじゃないっすか」

「あ……あの時のこと、覚えてたんだ」

冗談めかして言っただつもりだったのに、彼は真剣な声で答えた。  
「ずーっと覚えてましたよ。薄情だよなあ……澄香さんは。俺は  
ずっと待ってたのに」

「ごめんごめん、まさかあなたみたいな若い子が、そんな真剣に  
考えてくれてたなんて……」

「そんな変わらないっしょ、同じ二十代だし」

「前半と後半じゃ全然違うのよ、感覚が」

「ま、澄香さんが何歳でもいいけど」

彼は一步、私との距離を詰めた。あの夜に感じた気配がふわり

と香った気がした。

「……俺を、彼氏にしてくれますか？」

真っ直ぐな瞳だった。そこにはもう、ふざけた色は一切ない。これは——私もちゃんと答えないといけないと思った。

「うん……鉄平くんがいいなら」

「……マジっすかッ！うわっ……！人生イチうれしい！」

彼は子供のように破顔すると、両手を広げた。

「抱きしめていいっすか？」

「ふふ、いちいち聞かなくていいよ」



「童貞っすから……」

「またそれ？」

笑いながら、私は彼の胸に飛び込んだ。固くて、温かい。彼に抱きしめられると、自分が本当に大切にされているような気がした。

## 第二章 猛獸

そして迎えた、初めて私の家に來た夜。

ベッドの端に腰を下ろした彼の背中、いつもの頼もしさが嘘のようにガチガチに強張っていた。間接照明だけを灯した薄暗い部屋の中。沈黙に耐えきれなくなったのか、彼が勢いよく頭を下げる。

「あー……その、よろしくお願ひします……っ！」

「ふふっ、そんなに緊張しなくても」

「だって……初めてっすから……。澄香さんのこと、傷つけちゃったらどうしようって……」

大きな身体をちぢこまらせて震える声は、まるで捨て犬のようだ。私を路地裏で助けてくれたあの獰猛な姿とは結びつかない。そのアンバランスさが、たまらなく愛おしかった。

「そうだよね。……大丈夫、ゆっくりでいいよ」

私が微笑みかけると、彼は少しだけ顔を上げ、すがるような視線を向けてきた。

「一応、ネットの動画とかではよく見るんすけど……」

「ちよ、ちよっと待って。あれはあくまでファンタジーなのよ。

現実とは違うから……参考にしないでね？」

「そっか……そっすよね……。ごめんなさい、俺、ほんとバカで……」

しゅんと耳を伏せる音が聞こえそうなくらい落ち込んでしまう。彼らしい誠実さに、胸の奥が温かくなった。

「その……」

彼が恐る恐る、手を私の肩に添える。指先が微かに震えている

のがパジャマ越しに伝わってきた。

「キス……していいっすか」

「……うん」

私がこくりと頷くと、彼はゆっくりと顔を近づけてきた。触れ合う直前、ぎゅっと固く目を閉じる彼のまつ毛が震えている。そして、小鳥が啄むような、あまりにも控えめで可愛いキスが降ってきた。

ちゅっ、と音が鳴りそうなほど軽い接触。

しかし、そこから先が進まない。彼はただ、私の唇に自分の唇

を押し当てたまま、どうしていいか分からない様子で固まっていた。彼の顔は限界まで赤く染まり、耳まで真っ赤になっている。

（かわいい……）

普段の私なら、自分から動くことなんて絶対にならない。前の恋愛でも、基本的には相手に委ねてばかりだった。けれど、この純粹で大きな彼を前にして、私の中で何かが弾けた。

——私が、教えてあげなきゃ。

そんな得体の知れない使命感に背中を押され、私はそっと彼の首に腕を回した。そして、彼が唇を離そうとしたその一瞬の隙を

突いて、勇気を出して自ら唇を割り、舌を滑り込ませた。

——これが間違いだったと気づいた時には、もう遅かった。

「あああっ♡♡もう、むりいっ♡ぬいて、ぬいてえ……っ♡」

ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡

懇願する私の言葉など、今の彼の耳には届いていない。背後から覆いかぶさる巨大な質量。彼の下腹部が私の臀部を打ち据えるたびに、部屋中に湿った破裂音が木霊する。若い、あまりにも若くて無尽蔵なスタミナ。鍛え上げられた強靱な腰が、私の身体を

強烈に揺さぶり続けていた。

「ごめん、とまれない……！たまんねえ……澄香さんのまん

こ……♡」

「ひぐッ♡あっ♡あっ♡」

「きゆうきゆう締め付けてきて……全然、手でやるのと違う！」

「しよんなこと、いわないでええ♡♡♡」

狭い膣内を、凶器のように硬直した剛直が蹂躪していく。擦れるなんて生易しいものではない。内壁のひだ一枚一枚をごりゅごりゅごりゅっ♡と力任せに挟り、私の弱い部分を的確に押し潰し



てくる。

「あー♡またでそ……♡またいつしよにイキましょ！」

彼が唸り声を上げ、腰の回転速度を上げた。

ドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッド♡♡♡

「あっ♡あぁあぁあっ♡♡♡まだ、いぐうつ♡♡♡」

逃げ場のない最奥を穿たれる衝撃。視界が白くスパークする。

ドチュンッ!!!♡♡♡

彼が咆哮を上げ、私の胎内で大きく跳ねた。ゴム越しにすら伝わる射精の拍動。

びゅっ、びゆるっ、びゆるるっ!!!♡♡♡

大量の白濁が吐き出される感覚に合わせ、私の身体もびくっびくっ♡と痙攣し、奥までずっぷりとはまり込んだ肉竿を搾り取るように収縮した。

「くっ……はあ、はあ……」

余韻に浸る間もなく、ぬちゅう……♡と粘着質な音を立てて、彼自身が引き抜かれる。

ずぽんっ♡♡

ぽっかりと開いた穴から蜜がとろり♡とシートに垂れた。

「はあ……はあ……♡」

終わった。やっと、終わった。

手足の力が入らない。泥のようにシーツに沈み込み、荒い呼吸を繰り返す。けれど、背後で聞こえたカサツという乾いた音に、私は凍り付いた。

「えっ……ちよつと……なんで、つけなおして……」

振り返った先には、新しいゴムを口に咥え、無駄のない手つきで装着している彼の姿があった。さっきまでは、不慣れな彼のために私がつけてあげていたのに。その手つきは、やけに手慣れて

いて、目つきはぎらぎらと飢えていた。

「もう一人で付けられるようになりましたんで」

「いや、そういうもんだいじゃなくて……！まだするのお!?」

「ごめん、あと一回だけ……！」

「さっきもそう言ってたのに……！」

「責任取りますから……！ねっ！」

「あっ……！」

逃げようとした腰をガシッと掴まれる。有無を言わず大きな体で正面から上に乗られ、濡れそぼった秘所に、再び張り詰めた

亀頭があてがわれた。

「や、むり、もうげんか……」

ずぷううううううううううう♡♡♡♡

「んおお♡♡大きい、またはいつてきちやったあ♡♡」

抵抗する間もなく、質量のある熱がこじ開けて侵入してくる。

度重なる行為で充血し、敏感になりきった膣肉が、異物の侵入を拒みながらも吸い付いてしまう。

「っはあ……！澄香さんの中、何度入っても最っ高……！一生こ  
うしてたい……♡」

ドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッドチュッド♡♡♡

「ああああ♡♡♡中、もう、やらあ♡♡♡へんになるからあ♡♡」

「俺はとつくに変になつてますよ……一緒に変になつちまえばいい」

彼のピストンは、さっきよりも重く、深く、そして容赦がなかった。私の理性を破壊しようとするかのように、恥骨ごと打ち付けてくる。

ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡

「ひううう♡♡もっと、ちゅよくなつてるの♡♡♡♡」

「はあ……♡♡呂律まわらなくなってる澄香さんもかわいー♡昼間はあんなに清楚なのに……こんな顔になっちゃって」

涙とよだれでぐしゃぐしゃになった顔を、彼は愛おしそうに覗き込む。知り合ったばかりの彼に、こんなはしたない姿を見られているなんて――。

「いやああ♡♡はずかしい♡♡」

「はずかしくない！澄香さんのその顔、めっちゃくちやそそる！何度でも見たい！」

彼の言葉に熱がこもる。

「あ……でも……」

ふっと、空気が変わった気配がした。背筋がぞくりと凍るような、底冷えする気配が。

ずるううう……♡

彼が意地悪く、限界ギリギリまで自身を引き抜いた。入り口の粘膜がねちよお♡♡と引っ張られ、空虚感が襲う。

「他の男にはもう見せないでくださいね？俺専用、ってことで」

その瞬間の彼の眼は——どこか狂気を孕んだ瞳をしていた。

どちゅんッッッ!!!♡♡♡



助走をつけて叩き込まれる、今日一番の強打。

「おおおおおっ♡♡」

「澄香さん……すきだ……愛してる……絶対離さない……」

耳元で囁かれる重い愛の言葉の数々。熱烈な愛の告白と共に、  
快樂の暴力が襲い掛かる。

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュツツ♡♡♡

「あああああああっ♡♡♡おぐう♡♡つぶれちゃうう♡♡こわ  
れるうっ♡♡」

「澄香さん、俺だけって言って？」

最高速度で奥を容赦なくえぐられ続け、私の思考は白濁の中に溶けていく。もう、彼以外何も考えられない。彼の望む言葉以外、口に出せない。

「あ、あ、あ、鉄平くんだけえ♡♡♡鉄平くんだけなのお♡♡♡」

「じゃあ、おれのお嫁さんになってくれますか？」

「なるう♡♡なるからっ、ゆるしてえ♡♡♡」

「はあ……♡約束ですよ！最後にまた一緒にイキましょ！」

「そんなにゃあ……♡♡」

彼は私の足をさらに大きく開き、腰を密着させた。最奥を滅多打ちにされながら、内壁をぐりぐりと擦り上げられる。

ドチュンッドチュンッドチュンッ!!!♡♡♡  
 ゴリユゴリユゴリユゴリユゴリユッ!!!♡♡♡

「イ、イクウ!!!イクイクイクつ!!!イっちやううう!!!♡♡」

「俺も……!!!」

彼が私の奥深くまで潜り込み、今日何度目かもわからない限界を迎えた。

どぴゅー!!!どぶっ、どぶっ、どぶっ♡♡♡

膜越しにすら、さつきより激しい勢いを感じる。あふれ出るほどの熱量。これがもし生で中に出されていたらと思うと、子宮が恐怖と期待で震え上がった。

「んんっ……う……あ……♡♡」

そのままぎゅううつと強く抱きしめられ、濃厚なキスが降ってくる。私の体内で、まだ彼の剛直はゆるゆると脈打ち、硬さを保っていた。

「澄香さん、最高でした……!」

ちゅうう……♡♡じゅるう……♡♡ぬぷう……♡♡

「ん、あ……んむ……♡」

ねっとりした舌が口内を蹂躪し、私の唾液と彼の熱が混ざり合う。疲労と絶頂の余韻で、意識が急速に遠のいていく。

「澄香さん、大好き……♡これで、俺のもの……♡」

最後に聞いたのは、熱に浮かされた、けれど芯のあるその言葉だった。彼の腕の中に閉じ込められたまま、私は闇へと落ちていった。

カーテンの隙間から差し込む光が、瞼を白く焼いた。重い。

泥の中に沈んでいるかのように、身体の節々が鉛のように重かった。

「ん……う……」

のろのろと身を起こすと、ずきりと腰に鈍痛が走った。昨夜の記憶が、濁流のように脳裏に押し寄せてくる。終わりのない絶頂、獣のような彼、そして何度も意識を飛ばした自分。

（私、生きてる……？）

恐る恐る布団をめくると、私はちゃんとパジャマを着ていた。あれだけ乱れて、最後は記憶もないのに、ちゃんと服を着せてく

れたんだ。そう思って、ふと違和感を覚える。ショーツの感触が変だ。確認してみると、見事に前後が逆だった。意識のない私に、彼が一生懸命、不慣れな手つきで着せてくれたのだろうか。その光景を想像すると、あんなに酷い目に遭わされたはずなのに、口元が緩んでしまう。

「あ、起きたっすか！」

昨日の猛獣のような姿はどこへやら、そこにはいつもの人懐っこい笑顔があった。その大きな両手には、パンパンに膨らんだコンビニのビニール袋が提げられている。

「身体、痛くないっすか？……って、痛えよな。ほんとすんませ  
ん」

ベッドの縁に腰を下ろすと、彼は少し申し訳なさそうに眉尻を  
下げて私の頭を撫でた。

「なんか作ってみようかと思ったんすけど……ろくなもん作れな  
さそうだから、コンビニ行ってきました」

ガサガサと袋を開けながら、彼が照れくさそうに笑う。中から  
は、おにぎり、数種類のパン、インスタントスープにゼリー飲料  
まで、とても二人では食べきれないほどの食料が次々と出てきた。



「おにぎりとパン、どっちが好きっすか？どっちが食べたいかわかんなかったんで、とりあえず目に付いたやつ全部買ってきたんすけど」

「ぜ、全部って……こんなに食べられないよ」

「いいんすよ、残ったのはオレが全部食うんで。……ほら、澄香さんは座ったままでいいっすから。オレが食べさせましょうか？」

健気な気遣いは嬉しいけれど……そもそも私がこんなにもボロボロで動けないのは、他でもない目の前の彼自身のせいなのだ。

毛布の下で少し身じろぎしただけで、腰から下にかけてズキツとした鈍い痛みが走る。昨夜、何度も何度も奥の奥まで激しく打ち付けられた記憶が鮮明に蘇ってきた。

「……昨日はもう、死ぬかと思った」

私が恨めし気に睨むと、彼はバツが悪そうに視線を泳がせ、ポリポリと頬を搔いた。

「あー……ごめんなさいっ！まさかあんなにいいなんて思わなくって……その、暴走しちゃいました」

「本当に……本当に初めてだったの？信じられないんだけど」

「それはほんとつす！俺、嘘つかないつすよ」

彼はベッドの端に腰かけ、私の手をとって自身の頬に寄せた。温かい。昨夜、私を貪り尽くしたのと同じ体温だ。

「でも……取っというてよかった。澄香さんが最初で最後の女つすね」

「……最後？」

「当たり前じゃないっすか。俺にはもう、澄香さん以外ありえないんで」

サラリと言われた言葉に、心臓がトクンと跳ねる。純愛のよう

でありながら、どこか退路を断たれたような重み。彼の手が、私の指に絡まる。恋人繋ぎよりも強く、逃げられない力で。

「……忘れてないっすよね？」

不意に、部屋の空気が変わった。温度が下がったわけではない。けれど、肌にまとわりつく気配が、急にねっとり湿度を帯びた気がした。あの夜、路地裏で感じたものと同じ。そして昨夜、私の限界を無視して腰を打ち付け続けていた時と同じ気配。

「お嫁さんになってくれるって、言いましたよね？」

「あ、あれは……」

言葉に詰まる。確かに言った。けれどあれは、快樂の濁流にのまれ、許しを乞うために口走ったうわ言のようなもので――。言い訳をしようと顔を上げ、私は息を呑んだ。彼の瞳は笑っていた。けれど、その奥にある光は、獲物を追い詰め、喉笛に牙を突き立てる瞬間の獣のように、暗く、熱く、揺らめいていた。

「――約束したよな？」

「……っ」

「俺、嬉しかったなあ……。澄香さんも俺と同じ気持ちなんだって。だから、善は急げって言うし」

彼は私の抵抗など端から想定していないかのように、にっこりと微笑んだ。

「今度、挨拶行きましょーね♡」

有無を言わさぬ圧力と共に、強い力で抱きしめられる。広い胸板に顔が埋まる。洗剤の匂いと、雄々しい彼の匂い。

「……うん」

頷いた理由が、押し切られたからなのか、それとも本心からなのか、自分でもよくわからなかった。

「やった！一生大事にする！」

子どものように喜んで、私の頭を両手で包むように頬ずりをする。さつきまであれだけ息が詰まるような圧をかけてきたのに、今は本当に嬉しくて堪らないという顔をしている。この落差が、どこかおかしくて、泣きそうにもなった。

——この人の重さは、たぶん本物だ。執着も、熱も、全部。

怖いとは、思う。それと同時に、こんなにまつすぐに「欲しい」と思われたことへの、どうしようもない安堵もある。前の恋愛で、ずっと欠けていたものが、そこにあった。

怖いのか、愛しいのか。本当にわからない。

——でも、この胸の奥がじんわりと温かいのは、嘘じやなかった。  
彼の腕の中で、私はそっと目を閉じた。逃げようとは、もう思  
えなかった